妙円寺詣りの歌

大正四年

一、明くれど閉ざす　雲暗く
薄かるかや　そよがせて
嵐はさっと　吹き渡り
万馬いななく　声高し

二、銃雷と　轟けば
太刀稲妻と　きらめきつ
天下分目の　戦いは
今や開けぬ　関ケ原

三、石田しきりに　促せど
更に動かぬ　島津勢
占むる小池の　陣営に
鉄甲堅く　よろうなり

四、名だたる敵の　井伊本多
霧にまぎれて　寄せ来るや
我が昌厳ら　待ち伏せて
縦横無尽に　駆け散らす

五、東軍威望の　恃みあり
西軍恩義に　よりて立つ
二十余万の　総勢の
勝敗何れに　決せんや

六、戦い今や　たけなわの
折りしも醜の　小早川
松尾山を　駆けくだり
刃返すぞ　恨めしき

作詞　鹿児島女子師範学校　付属小学校教師　池上真澄
作曲　元鹿児島男子師範学校教師　佐藤茂助
文責者　関ケ原戦跡踏破知新会代表　窪田廣治

◎夜が明けたけれども、空一杯の雲で、うす暗いでした。
強い風がサーッと吹いて、すすきや、かるかやの穂がゆれています。侍たちが乗っている沢山の馬も、気分を高ぶらせてヒヒーン、ヒヒーンと声高く鳴いています。

◎鉄砲の音は雷のようにひびき渡り、刀は稲光のようにピカッピカッと光ります。東軍の徳川が取るか？西軍の豊臣が取るのか？日本国中を二つに分けた大きな戦いが、十五日朝八時、岐阜県の関ケ原で始まったばかりです。

◎一向に動き出さない島津軍に、北へ六百m位、高さ四十m位の笹尾山に居た総大将の石田三成(四一)が「動き始めろ」と三回も使いを出しますが、島津軍は動かずに小池に鉄のように堅く陣を構えたままです。

◎強いことで有名な敵の井伊直政(四一)や本多忠勝(五三)が霧の中に隠れて攻めて来たので、こちらの山田昌厳(二三)や加治木、福山町の兵隊が待っていてメチャメチャにやっつけたので、敵は散って逃げました。

◎東軍は徳川家康の力や人気を頼りにして集まり、西軍は豊臣秀吉からの恩返しに立ち上がったのです。東軍約十万四千、西軍約九万六千人、合計で二十万人余りです。サーどっちが勝ち、どちらが負ける結果になるのかな？

◎戦が真っ最中の昼ごろ、東南の松尾山(二三九m)の秀吉の養子の小早川秀秋(十九)軍一万五千人が汚いことに北に二kmの同じ西軍の大谷吉継(四二)五百人の陣に攻め下って裏切ったことは、ほんとうに残念なことです

七、前に後に　支えかね
　大勢すでに　崩るれど
　精鋭一千　われ独り
　猛虎負嵎の威を振るう
八、蹴たてて　駒の行くところ
　踏みしだかれぬ　草もなく
　西軍ために　気負い来て
　靡くや敵の　旗の色
九、家康いたく　荒立ちて
　自ら雌雄を　決せんと
　関東勢を　打ちこぞり
　雲霞の如く　攻めかかる
十、掛かれ進めと　惟新公
　耳をつんざく　雄叫びに
　勇む隼人の　切先の
　水もたまらぬ　鋭さよ
十一、払えば　又も寄せ来り
　寄すれば　又も切りまくり
　剛は鬼神を　挫けども
　我の寡勢を　如何にせん
十二、運命何れ　生か死か
　ここを先途と　鞭振るい
　奮迅敵の　中堅に
　活路を求めて　駆け込ます
◎前も敵、後からは裏切り者、耐えきれなくなった西軍の大部分は散り散りに西北伊吹山(一三三七m)などに逃げましたが、特に強い島津の千人だけが残って、怒った虎が岩の上から飛び掛りそうな勢いで構えています。
◎野原を駆け回る馬に踏まれて、草は全部踏み倒されています。島津軍が頑張っているので、残っている他の西軍の人達も、我先に元気よく攻めていったので、敵は旗を肩に担いで、ヒラヒラさせながら逃げて行きました。
◎島津の東南一千六百mの桃配山の家康は、非常に怒って爪をかみながら「俺が勝負を決めてやる」と東方六百mの陣場野まで前進して、関東から来た勢力全部で、雲や霞のように野山を埋め尽くして攻め込んで来ました。
◎突っ込め！進め！と六十六歳の義弘(別の名惟新)公の耳の鼓膜も破れるような激しい叫び声に、燃え上がった薩摩や大隅の元気者たちが振り下す刀の先は、水を切っても水がくっつかないくらい速くて烈しいものでした。
◎島津軍は敵に追い払われては又突っ込んで行き、突っ込んでは切りまくって、荒くて恐ろしい鬼もやっつけるくらい強いのだが、三万人に対して、こちらはたったの千人、人数が少な過ぎてどうしようもありません。
◎午後二時、生きるか死ぬか、勝つか負けるか、今が運の分かれ目だ。馬を鞭で打って、残った百人余りで、家康の本陣三万人の真ん中にチェスト行け！と勢い激しく殴り込み、突き破って敵の後ろの方へ生き延びました。

十三、譜代恩顧の　将卒ら
国家の存亡　この時と
鎬を削る　鬨の声
天に轟き　地にふるう

十四、篠を束ねて　降る雨に
横とう屍　湧く血潮
風なまぐさく　吹き巻きて
修羅の巷の　それなれや

十五、薙げど仆せど　敵兵の
重なり来る　烏頭坂
たばしる矢玉　音凄く
危機は刻々　迫るなり

十六、骸も染みて　猩々緋
御楯となりし　豊久を
見るや敵兵　且つ勇み
群がり寄する　足速し

一七、賜いし御旗　振りかざし
阿多長寿院　駆け入りて
兵庫入道　最期ぞと
名乗る雄々しき　老の果

十八、欺かれたる　悔しさに
息をもつかず　忠吉ら
くつわ並べて　追い来しが
返す我が余威　また猛し

◎親子代々お世話になった 侍 や兵隊達は、薩摩、大隅の国が残るか、滅ぼされるかは、今がその分かれ目だとの覚悟で、刀と刀が激しくぶつかり合う音や、掛け声は天にも届き地震のように大地も揺れる程の凄まじさでした。

◎竹をたばねたように大粒な土砂降りの雨の中に、戦死者が横になって倒れていたり、傷口から吹き出す血のために、吹いて来る風までも生臭いようです。地獄の一丁目も、こんなにあるのかなと思わせるような怖さでした。

◎中央突破の後、東南に約二ｋｍ　烏頭坂では豊久(三二)は捨座で一番後を守っていたが、倒しても殺しても次々に敵が追いついて来ます。激しく飛んでくる鉄砲の玉の音は物凄いもので、いよいよ危なくなって来ました。

◎槍で七度も突き上げられて、死体も真っ赤に染まり、義弘公の身代わりとなった豊久を見た敵の兵隊は、益々勇気を出して、一固まりになって急いで追って来ます。豊久の墓は岐阜県上石津町と吹上町永吉にあります。

◎東南へ千五百ｍ牧田で蒲生町の地頭(町 長)阿多長寿院は義弘公から貰った旗を振りながら「兵庫入道(義弘)の最後の 姿を見よ」と嘘の名前を叫んで突っ込んで勇ましく死にました。五三才とは実践のぎりぎりの歳です。

◎騙された残念さで休みもせずに家康の四男松平忠吉(二一)や井伊直政(四一)が馬を並べ追って来ましたがこちらもまだ残っている力で猛烈に打ち返したので、二人とも傷を受けて引き返しました。午後四時戦い止め。

十九、牧田川添い　ひと筋に
行く行く敵を　蹴散らして
駒野峠の　夜に紛れ
伊勢路さしてぞ　落ち給う

二十、献策遂に　容れられず
六十余年の　生涯に
初めて不覚を　取らしたる
公の無念や　嗚呼如何に

二一、興亡総べて　夢なれど
敵に背を　見せざりし
壮烈無比の　薩摩武士
誉れは永久に　匂うなり

二二、無心の蔓草　今もなお
勇士の血潮に　茂るらん
仰げば月色　縹渺と
転た往時の　懐かしや

◎牧田川に沿った一本道を、途中の敵を蹴ちらして、南に二三km、十時頃、養老山の高さ五百m駒野峠の夜道に隠れて、三重県伊勢の国に向かって落ち延びました。義弘公が捨てた鎧を横山休内は大阪まで着て行きました。

◎大垣での会議で「疲れている東軍に夜中に攻め込め」との意見を取り上げられないで、六十六年間の一生の中で初めて負けて、思わぬ恥を掻かされた義弘公の残念さはどんなにあったことでしょうなぁ。

◎栄えたり滅んだりする世の中のすべての姿は夢のように儚いものだけれども、敵に背中を見せて逃げるような卑怯な事をしないで、中央突破した薩摩武士の比べもののない勇ましさはいつまでも末永く光輝いています。

◎士の中には死傷者の血が流されたのでしょうに何も知らない髷は今でも茂っています。十五日午前〇時からの祭りの後、帰る時、天には満月が霞んで見えます。世の中が変わる程、益々昔が懐かしく思い出されますよなぁ。